島根県公立小中学校
事務職員研究会
会　長　：　吉　賀　孝　則
（浜田市立国府小学校）
編　集　：　情　報　部
VOL.70　2021.3.3（雛祭号）
発行責任者　坂井　佳恵（大和中学校）
島事研ホームページ
http://www.oh-net.com/~kenjiken/

爽 SOU

【　目　次　】

- 今年度をふりかえって（副会長　横貝淳子）
- 研究部コーナー
- 松江教育事務所に勤務して
- 人権コーナー
- まんが「しまじぃとけんくん」
- 編集後記

今年度をふりかえって

副　会　長　　横　貝　淳　子

「コロナ禍」の今年度もあとわずかで終わろうとしています。２０２０年は東京オリンピック開催年ということもあり、わくわくした気持ちでスタートしましたが、一変、未知のウイルスとの戦いが始まるとは、誰もが想像できなかった激動の年となりました。

３月４月、学校では卒業・進級・入学の大切な時期に多くの学校で臨時休業となり、児童生徒対応はもちろんのこと、感染症対策にも奔走する毎日でした。先の見通しがもてず、みんなが未来への不安や戸惑いを抱えていました。

ですが、そんななかだからこそ、日常のありがたさをつくづく感じることができました。本校では９月上旬に体育祭を開催しましたが、実施後に校長が生徒会役員にインタビューしました。そのとき会長・副会長は口を揃えて感謝の言葉を伝えてくれました。「コロナでいろんなことができなくなった。自分たちはあきらめかけていたが、先生方はなんとかできる方法を一緒に考えてくれて、励ましてくれて、支えてくれた。本当に感謝している。」また、校長も「コロナでできないことも確かにあるが、できるためにどうすればいいのか考え、できることを行っていくことがこれからにつながる。」と職員に話しました。当たり前が当たり前ではなく、「いつもどおり」ができないなかで、知恵を絞り工夫を凝らすことや想いや言葉を交わしながら協働していくことが大切だと気付かされました。

話は変わりますが、本校の校長室だより１月号に干支についての記事がありました。

「干支は古代中国で生まれた。12 支は植物が芽ばえてから枯れるまでの一生の状態を表している。12 支の最初にあたる「子」は植物の種子が内部で生命活動を始めたときの状態を表している。2 番目の「丑」は種子の中で芽が生じ発芽する前の曲がった状態、これから伸びようとしている状態を表している。（参考文献「干支の活学」安岡正篤著）」

干支は動物と思っていましたので驚きました。そして、「丑」の状態が、世の中も島事研もちょうど当てはまると思いました。「子」の年に「島事研ビジョン２０２０」を提案し新たなスタートを切りました。「丑」の今年は、第六次研究中期計画を会員の皆さまにお示しし、ゴールを目指してともに伸びていこうとする年です。

どんなに苦しい今もいずれは過去となり、そして未来につながっていきます。試行錯誤しながら、子どもたちの笑顔が輝く、よりよい未来につなげるために、ともに頑張っていきましょう。

研究部コーナー

◇第六次研究中期計画の策定に向けて

２０１５年　：　６８％
２０２１年　：　７３％

この数字は、研究部が実施したアンケートの「学校事務職員に研究は必要だと思いますか」という設問に、「必要」「概ね必要」と回答された方の合計の割合です。アンケートに全会員が回答してくださったわけではないので、研究会としての正確なパーセンテージではありませんが、回答者の約７割が「学校事務職員に研究は必要」とお考えであるということが、わかります。

また、２０１５年のアンケートで「研究が必要な理由」について質問したところ、一番多かった回答が「資質（意識・知識）向上のため」だったようです。しかし、この度行ったアンケートでは、「研究が必要な理由」については、質問していません。その理由は、今次の研究は「私たちはなぜ研究活動をするのだろうか」というところから、研究内容を考えようと決めたからです。結果、第六次研究中期計画では、研究活動を行う理由を「学校事務職員として成長するため」と定め、会員全員で進めていきたいと考えています。

では、「成長」とはどういうことでしょうか。それを「言葉の習得」を例に考えてみます。私たちは普段、「言葉」を、自分の意思を伝える手段のひとつとして使っていますが、生まれてからこれまで、少しずつ、自分が使える言葉の数を増やしてきているはずです。昔から使われ続けてきた言葉。時代とともに生み出される言葉。たくさんの言葉を、皆さまはどうやって「普段使う言葉」にしてきたのでしょうか。それは、言葉を知り、意味を学び、他の人に対して使うことで、自分の中で言葉を成長させているからだと思います。きっと研究にも同じ事が言えると考えます。「島事研ビジョン２０２０」では、目指すゴールを「　『つかさどる』を形にする　」と定め、ゴールにたどり着くための研究活動を行います。

平成２９年４月に学校教育法が改定されてから、もうすぐ４年が経過しますが、これまで「つかさどる」とはどういうことなのか、研究会の中でも、言葉を知り、意味を学んできました。それをこれからの数年間で、会員それぞれが「研究」という形で実践を行い、他の人に対して伝えることで、「学校事務職員としての自分」の成長につなげていきましょう。普段言葉を使うことと同じように、研究を行うことが皆さまの日常になることを願って、計画を予定しておりますので、研究活動の推進にご協力のほど、よろしくお願いいたします。

松江教育事務所に勤務して

松江教育事務所　宇野　　翔

令和２年４月から松江教育事務所で勤務しています。新型コロナウイルス感染症により，当たり前だった日常が当たり前ではなかったことを実感する日々の中で，たくさんの方に助けていただきながら，なんとか仕事を進めています。

総務課では，主に給与に関する仕事を担当しています。これまでは，書類を作成し審査してもらう側だったのが，提出された書類を審査，指導する側になり，これまでとは違った視点から仕事をしています。その中で，事務処理には条例や規則等の根拠があり，それに基づいた処理を行うことが必要ということを改めて実感しています。

学校からの問い合わせの際には，その度に，条例，規則，要綱，手引き，類似の事例などを再度読み込み，制度に合致した回答を示せるようにしています。自分の回答がその問い合わせの答えになるのだと思うと，発言に対しての責任の重さを感じるとともにやりがいも感じます。当然，自分だけでは分からないこともありますが，そんなときには総務課職員の方とその都度，協議や相談ができる環境はとても助かっています。ひとり職と言われることが多い学校現場との一番の違いなのではないかと思います。

教育事務所で勤務させていただき，昨年までの自分の業務への意識，認識などはどうだったかなぁ　と考えると，今とは比べものにならないと感じています。手当認定一つをとっても，昨年までであれば，「要綱に載ってるから」，「以前はこうだったな」と，どこかマニュアルっぽく淡々と処理をしていたように思います。しかし，その裏には，しっかりと法的根拠が存在していることに改めて気付かされました。

教育事務所での勤務は，自分にとって成長を感じる貴重な期間であり経験となっています。この期間にしっかりと自分の力量を高めていき，学校に戻った際には，学校事務職員の立場から教育活動の充実に還元できるよう，これからもがんばっていきたいと思います。

人権コーナー

多様性（ダイバーシティ）と人権

川本町立川本小学校
津田　耕一

私の中で人権教育とは，「正しく知ること　→　受け容れること　→　つながること」だと結論付けていました。しかし，最近改めて人権教育と自分とをつなげて考えたとき，少し感じ方が変わってきました。

本校は今年度と来年度，県の人権教育研究指定校になりました。先日，人権同和教育課長が直々に来校され，職員向けに研修をしてくださいました。その中で「多様性（ダイバーシティ）」の話が出たときに，自分が考えていることと共振しました。

偏見によって，根拠のない優劣を二次元的につけることに意味を見出せません。むしろ，三次元的に考えて個々の抱える長所や短所を，集団の中で活用したり補い合ったりすることが，「長所にも短所にもなり得る多様性」を最大限に生かせるのではないかと思っています。「得意なことは得意な人に頼ろう！彼（彼女）の苦手なことでこっちが得意なことはやるからさ！」ということです。

人は，誰しも無限の可能性と価値を内包していることをまず心に留めたいです。お互いに心から敬意を払い，お互いの声に耳を傾け，話し合う中で，相乗効果を生み出す人間関係を構築していくことが幸せな生き方に，幸せな世界につながっていくのだと思っています。

今関心を寄せていることは，自分以外の他者全てに大きな可能性と価値があることを前提に，どのようにお互いの長所と短所を補完できるか，またどのように相乗効果を発揮するか，ということです。

私は，学校事務職員も教育職員も「知らないこと・広く知られていないこと」によって，少なからず人権を侵害されている事実があると考えています。しかし，それは関心を持って知り，学ぶことでしか見えてこない課題です。無限の可能性と価値をもつ「あなた」があなたらしく生きる権利を阻害しているものはないか，あればそれはなにか，それらを考えることは生き方を見直すことにつながり，行動の変容につながります。これは学校現場で働く以上に，個人の生き方の根幹に関わる重要な価値を持つものだと思います。

今，私にとっての人権教育とは，「『私たち』のために自分を大切に。そして人を大切に。」ということかと思います。時間が経つとまた変化するかもしれませんが，これが今の「私の答え」です。

長文でしたが最後まで読んでくださり，ありがとうございました。

原作・画　：　佐伯　圭一

【編集後記】

久しぶりのへき地校に勤務して，早３年。雪景色を楽しみにしていましたが，３年目にして，初の大雪。それもドカ雪。しかし，雪の降る日数は着実に減っているように感じます。本当に温暖化が進んでいるんでしょうか？！

スキーや雪合戦，雪だるまやかまくらが身近に体験できるこの環境を未来の子供たちにも残したいものです。　（N．K）